

## 「新・北斎展」 波・富士だけが北斎じゃない

森アートセンターギャラリー（六本木） 2019.01.17～03.24



本展は、江戸時代の世界的に有名な浮世絵師「葛飾北斎」の初期から晩年までの壮大な画業を通覧するもので、画伯の人生を作風の変遷と主に用いた画号により「6期」に分けて紹介する企画で、北斎ファンにとっては“必見の展覧会”である。

《富嶽三十六景 凱風快晴》 No.33 部分 多色摺り木版 1830～34年頃

凱風とは南から吹く風のこと、夜のとぼりがおもむろに引き上げられようとする朝、朝早く一瞬の朝焼けに赤く染まる「赤富士」の光景は、美し過ぎるほどに端正な山容で、段だらに広がる縹雲に明け染める空の色調が実に美しい。

「北斎」の「富嶽三十六景」は、刻々と表情を変える富士山の姿を描く「全46枚の連作」で、今なお世界的に高い評価を得ている作品で、印象派の名だたる画家の「ゴッホ」や「ドガ」たちに多大の影響を与えたことで知られている。

画伯の活動は、勝川派の絵師として活躍した**春朗期**（20～35歳頃）、勝川派を離れて浮世絵画派とは一線を画した作画活動を行った**宗理期**（36～44歳頃）、読本の挿絵に傾注した**葛飾北斎期**（45～50歳頃）、多彩な絵手本を手掛けた**戴斗期**（51～60歳頃）、錦絵の揃物を多く制作した**為一期**（61～74歳頃）、自由な発想と表現による肉筆画に専念した**画狂老人期**（75～90歳頃）の年代別に作品を鑑賞することで、画伯の生長や趣向を感じ取ることができる企画である。

《弘法大師修法図》 紙本1幅 1844～47年 東京足立区 西新井大師總持寺



画伯が晩年の80歳後半に作成した傑作は、弘法大師が修法（加治）している場面で、当時流行していた疫病を鎮めたとされる。

一面の暗幕の中に、巨大な病魔が牙を剥き、金棒となわを持って大師に襲いかかろうとしている。しかし、大使は怯むことなく、泰然と祈祷を続けて、背後には犬が病魔を見据えて吠え続けている。